法宝と法蔵の著作間における一致について——三一権実論争との関連において——

小野嶋祥雄

はじめに

初唐期の中国仏教界において、三乗真実説と一乗真実説を主張する論師の間で三一権実論争が繰り広げられたことは著名である。玄奘三蔵（六〇二—六六四年）が門人の慈恩大師基（六三二—六八二年）等と共に三乗真実説を主張した当時の長安仏教界の思想的主流は、一乗思想をその根底に据えるものであり、一乗思想を自身の思想的基盤とする論師にとっては、玄奘門下が主張する三乗真実説は到底受け入れることが出来ない思想であったと考えられる。

本稿が考察の対象とする、法宝（六二七—七〇三／七〇六年頃）と法蔵（六四三—七一二年）は、法宝は『涅槃経』を法蔵は『華厳経』を最高の教えとする異なりはあるものの、共に一乗思想を自身の思想の根底に据える仏教者である。この中、法宝に関しては、『一乗仏性権実論』（以下、『権実論』と略）と『一乗仏性究竟論』（以下『究竟論』と略）を著して法相唯識を批判したことから、一連の論争の当事者として認識されており、また、法蔵は論争の当事者ではないが、自身の著作の中で法相唯識を巧みに批判することはよく知られているところである。

ところで、その法宝と法蔵の著作の間には、『究竟論』と『五教章』では思想的な一致が指摘され、『究竟論』と『華厳経探玄記』（以下『探玄記』と略）には引用経論の一致が見られることが指摘されている。その中、後者の『究竟論』と『探玄記』の引用経論の一致については、『究竟論』は円測の『解深密経疏』を参照し、『探玄記』は『解深密経疏』と『究竟論』とを参照したことが明らかにされている。そしてこのことから、法宝と法蔵の著作間にみられる一致は、円測の『解深密経疏』からの影響と、法蔵が法宝の著作を参照したことに由るものであると考えられている。

しかしながら、今回、新たに検出することの出来た法宝と法蔵の著作間に於ける一致箇所を検討してみると、三一権実論争の中で著された霊潤（？—六五〇年頃）や神泰（？—六五九年—？）の著作とも一致することが判明したのである。

よって、本稿では、新たに検出することの出来た法宝と法蔵の著

作間に於ける一致箇所の検討を通じて、これらの一致が当時争われていた三一権実論争と密接な関連を持つものであることを明らかにしていきたい。

一　法宝と法蔵の交渉

①　法宝と法蔵

法宝と法蔵の関係について、先ずは法宝と法蔵の生没年より確認しておきたい。法蔵の生没年に関しては、先学の研究も多く、六四三から七一二年が定説となっている。一方、法宝の生没年については、その根本資料となる『宋高僧伝』には生没年を示す文言が記載されていない。しかしながら、生年については久下陞氏が六二七年頃と推定され[①]、また没年は根無一力氏が七〇三年から七〇六年の間であると推定している[②]。このように、生没年からみれば、法宝が法蔵の十数年先輩となるが、法宝と法蔵はほぼ同時代の論師であるといえよう。

そこで次に問題となるのが、法宝と法蔵の間に何かしらの交流があったのかという問題である。法宝と法蔵は、それぞれの伝記や著作の撰号等から、共に長安を活動拠点としていたことが知られる。それら著作の撰号から得られる情報の中で注目されるのは、両者が共通して大薦福寺と仏授記寺とに住していたことであるが[③]、現存の資料からは両者が同時期に大薦福寺と仏授記寺に住していたのかは明らかにすることができない。

現在の所、法宝と法蔵の交流を確認することが出来るのは、当時盛んに行われていた訳経の場に於いてである。法宝と法蔵は当時の長安の著名な仏教者がそうであったように、新たに招来された仏典の訳場に参加しており、以下に示す通り、両者は同じく実叉難陀『八十華厳経』（六九五―六九九年に訳出）と義浄の訳場（七〇〇―七〇三年）に証義として参加しているのである。

・慧苑『華厳経略疏刊定記』巻一

第三本者証聖元年、于闐国三蔵実叉難陀、此云二喜学一、於二東都仏授記寺一再訳二旧文一、兼補二諸闕一、計益二九千頌一。通レ旧総翻二四万五千頌一、合成二漢本八十巻一。大徳義浄三蔵、弘景禅師、円測法師、神英法師、法宝法師、華厳和上等同訳。復礼法師綴文。

（『新卍続蔵』巻三・五九三下）

・智昇『開元釈経録』

即以二久視元年庚子一至二長安三年癸卯一、於二東都福先寺及西京西明寺一、訳二金光明最勝王、能断金剛般若、〈中略〉及竜樹勧誡頌一。已上二十部一百一十五巻。北印度沙門阿儞真那証梵文義。沙門、波崙、復礼、慧表、智積等筆受証文。沙門法宝、法蔵、徳感、成荘、神英、仁亮、大儀、慈訓等証義。

（『大正蔵』巻五五・五六八中下）

この訳経の現場に於いて、具体的にどのような交流があったかのかを示す記述は存在しないが、同じ訳場に参加しているということは、法宝と法蔵に面識があったことは間違いないであろう。なお、『八十華厳』の訳場に同じく円測も参加していることは、後に述べる『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』の引用経論の一致を考えるに際し注意が必要である。

以上のように、伝記資料等が示す法宝と法蔵の交流は、両者に面識がある程度にしか過ぎない。しかしながら、次に検討していく両者の著作間での影響関係には、明かな交渉の跡が見て取れることから、互いに面識があったということは、その著作間の交渉を裏付ける事実として重要な意味を持つのである。

② 法宝と法蔵の著作間に於ける交渉（従来の定説）

今日に至るまで、法宝と法蔵の著作間の影響関係についての研究はあまり着手されていない。法蔵と法宝の個別的な研究は、法蔵に関しては既に膨大な研究成果が報告されており、法宝についても、一九八六年に淺田正博先生によって『究竟論』の巻一・二・四・五の四巻が検出され、その全体像がほぼ窺い知れるようになったことから、法宝の研究についても多くの研究成果が報告されている。[4] しかしながら、法宝と法蔵の著作間の影響関係を論じた研究に限れば、それらは数える程しかなく、以下に示す四点の研究成果が報告されているのみである。

① 富貴原章信「初唐 法宝の仏性説について」（『仏教学セミナー』第十八号、一九七三年）、同「五教章の種性義について」（『南都仏教』三二号、一九七四年）

② 根無一力「一乗仏性究竟論の撰述と時代背景」（『叡山学院研究紀要』第九号、一九八六年）

③ 吉津宜英「『華厳経探玄記』における一乗大乗批判」（『華厳一乗思想の研究』、一九九一年、大東出版社）

④ 城福雅伸「『一乗仏性究竟論』と『華厳金師子章』における「金の譬喩」からの一考察」（共同研究「『一乗仏性究竟論』における問題点とその検討（二）」・『仏教文化研究所紀要』第三五集、一九九六年）

論述の都合上①→④→②→③と見ていくが、①の富貴原論文は、一九八六年の『究竟論』発見以前の研究であり、『卍続蔵経』に収められている『究竟論』巻三「仏性同異章第七」について検討を加えたものである。富貴原氏はこの中で、「仏性同異章第七」に説かれる仏性義と、法蔵の『五教章』「種性義」に説かれる仏性説とに思想的な一致が見られることを指摘している。

また④の城福論文は、法宝の『究竟論』と法蔵の『華厳金師子章』が同じく「金の譬喩」について言及することに着目し、それらの比較を通じて法宝の教学的特徴の把握を試みたものである。城福氏はその中で、法宝と法蔵の唯識思想が共に如来蔵思想を基盤に据

えたものであることを明らかにしている。

富貴原氏・城福氏の論攷は、共に法宝と法蔵の思想的一致を指摘したものであるが、次にみる②根無論文と③吉津論文は、法宝と法蔵の著作の間に引用経論の一致がみられることを指摘した研究である。

先ず②の根無論文は、『究竟論』の撰述年代やその思想史的位置付けについて論じられており、『究竟論』を研究するにあたり必読の論文となっている。根無氏はその論文の中で、『究竟論』巻二「列経通義章第五」に一乗思想と三乗思想の典拠として引用する経論が、円測の『解深密経疏』巻四に引用する経論と類似することを明らかにし、またそれらが、法蔵の『探玄記』巻一「第三立教差別・第五明現伝」に引用される経論とも一致することを指摘している。根無氏はこの『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』の引用経論の一致は、法宝と法蔵が同じく円測の『解深密経疏』を参照したことに起因するとしている。

次に③の吉津論文は、根無氏の指摘を踏まえて『探玄記』の当該箇所を詳細に検討したもので、『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』の対照表を作成して、『究竟論』は『解深密経疏』を参照し、『探玄記』は『解深密経疏』と『究竟論』とを参照していることを明らかにしている。

[※今後の考察の便宜上、以下に『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』が一乗思想・三乗思想それぞれの出拠として引用する経論の対照表を示しておくこととする。本表の作成に際しては、前述の根無論文・吉津論文を参照した。表中の①・②等の番号は各文献に引用される順番を意味し、また、各文献に共通して引用される経論については網掛けを施している]

●三乗思想の教証

『解深密経疏』	『究竟論』	『探玄記』
① 善戒経一	① 善戒経一	
② 地持経巻一	② 地持経巻一	
③ 瑜伽論巻三五	③ 瑜伽論巻三五	
④ 解深密経巻二	④ 解深密経巻二	② 解深密経巻二
⑤ 深密解脱経巻二		
⑥ 大菩薩蔵経巻五	⑤ 大菩薩蔵経巻五	
⑦ 央掘摩羅経巻三	⑥ 央掘摩羅経巻二	
⑧ 善戒経巻三	⑦ 菩薩善戒経巻三	
⑨ 勝鬘経		
⑩ 大般若経巻五九三		① 大般若経巻五九三
⑪ 十輪経巻九		⑧ 十輪経巻九
⑫ 地持経巻二		
⑬ 瑜伽論巻三七	⑧ 瑜伽論巻三七	③ 瑜伽論巻三七
⑭ 瑜伽論巻二		
⑮ 瑜伽論巻六七	⑩ 瑜伽論巻六七	

⑯瑜伽論巻五二
⑰荘厳論巻一
⑱梁摂大乗論巻一四
⑲唐摂論巻一〇
⑳大業摂論
㉑無性釈論
㉒仏地経論
㉓十地経論巻一一

●一乗思想の教証

『解深密経疏』	『究竟論』（『権実論』）	『探玄記』
①涅槃経巻七	①大雲経巻四	
②涅槃経巻二五		
③涅槃経巻二七	②涅槃経巻二七・三六・三七	
④涅槃経巻三三		①涅槃経巻三三
⑤法華経巻一	③法華経巻一・三	②法華経巻一
⑥勝鬘経	⑩勝鬘経	
⑦須摩天子所問	④法華論	④法華経巻三
⑧入楞伽経巻二	⑧入楞伽経巻二	
⑨四巻楞伽経巻一	⑨四巻楞伽経巻一	⑥法華論
⑩梁摂大乗論巻一五	⑤仏性論巻二	⑭仏性論
⑪智度論巻八四	⑫仏性論巻二	

	⑨瑜伽論巻五二	④善戒経
	⑪荘厳論巻一	⑤地持経
		⑥解深密経巻二
		⑦深密解脱経

		⑫法華論
		⑬宝性論巻二
		⑭法華経巻二
		⑮智度論巻九三
		⑯涅槃経巻二三
		⑰楞伽経巻四
		⑱法華論
		⑲勝鬘経

		⑥密厳経巻下
		⑦法鼓経
		⑪宝性論巻二

		⑮密厳経
		⑦入楞伽経巻二・四・七
		③法華経巻二
		⑤大智度論巻九三
		⑧法華論
		⑨楞伽経
		⑩勝鬘経
		⑪華厳経
		⑫無上依経
		⑬宝性論

③従来説の再検討

ところで、法宝と法蔵の著作が参照したとされる円測についてであるが、彼を一乗家と見るか三乗家と見るかについては、現在に至るまで研究者の間で相違があるようである。今その問題について詳しく検討する暇はないが、本稿にとって重要なのは、法宝と法蔵が円測を一乗家か三乗家のどちらと認識していたかである。

法蔵が円測を一乗家か三乗家のどちらと認識していたかは不明であるが、法宝に関していえば、『究竟論』巻五「対妄通経章第十」に円測の解釈を三乗家の主張として批判する箇所のあることが梯信暁氏によって指摘されている。[5]

もちろん、この事実のみを以って『究竟論』と『探玄記』の『解

深密経疏』参照を否定しようというものではないが、ただ、より幅広い観点から円測・法宝・法蔵の著作中に見られる引用経論の一致について検討すべきであると考えるのである。

それでは、どのような視点からこの一致について考えるべきであろうか。筆者はこの問題に対して、三一権実論争との関係から検討を加えたいと思う。というのも、『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』の当該箇所は、いずれも当時の三一権実論争を大いに意識した記述となっているためである。

・円測『解深密経疏』巻四

一真諦等一類諸師、依二法華等諸経及論一、皆作二此説一、一切衆生皆有二仏性一。〈中略〉二者大唐三蔵、依二諸経論一立二五姓一、無姓有情無涅槃性定性二乗必不二成仏一。

（『新卍続蔵』巻二一・二六八下―二七〇上）

・法宝『究竟論』巻二「列経通義章第五」

夫権経必文外有レ余、実経即言中決定。若不二列レ経対詳一熟得レ顕二其権実一。先列二証三乗五性経一釈レ有二余意一、後列二証一乗仏性経一顕二義決定一。

（『龍大論集』九二頁003―005）⑥

・法蔵『探玄記』巻一「第三立教差別・第五明現伝」

第五明二現伝一者、当今諸徳於二大乗中一自有二二説一。一立二三乗大乗一。以二此宗許一入寂二乗定不一成仏一、是故約二彼五性差別一具説二三乗一。二立二一乗大乗一。以二此宗許一入寂二乗亦並成仏一、是故約二此仏性遍有一唯説二一乗一。（『大正蔵』巻三五・一一三上）

これらの記述をみると、『解深密経疏』は「真諦等の一類の諸師」と「大唐三蔵」を、『究竟論』は「三乗五性の経」と「一乗仏性の経」を対比させており、『探玄記』は「現伝」として「当今の諸徳」が三乗説と一乗説を説くことを述べていることから、『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』の当該箇所が当時の三一権実論争を意識したものであったことは明らかであろう。

そこで以下に、新たに検出することのできた法宝と法蔵の著作における一致箇所の検討を通じて、これらの一致と三一権実論争との関連について明らかにしていきたい

二　法宝と法蔵の著作中における新たな一致箇所について

①　『解深密経』第二の引用について

既に指摘されてきた『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』の引用経論の一致箇所を検討していくと、『解深密経疏』には取りあげられず『究竟論』と『探玄記』のみに共通して引用される経論がある。これは、法宝と法蔵の引用経論の一致が、単に両者が『解深密経疏』を参照した結果によるものではなく、『究竟論』と『探玄記』の間で密接な関係があったことを示している。

また、『究竟論』と『探玄記』における引用経論の一致は、従来より指摘されてきた『究竟論』巻二「列経通義章第五」と『探玄記』巻一「第三立教差別・第五明現伝」の間だけに限られるものでもないようである。

これより検討する『解深密経』第二の文は、『探玄記』「第三立教差別・第五明現伝」に三乗思想の典拠となる文として引用されているが、『解深密経疏』巻四と『究竟論』巻二「列経通義章第五」にはこの文は引用されていない。

『探玄記』が引用する『解深密経』第二の文は、次の如くである。

又解深密経第二云、「乃至、更説二法要一。謂相無自性性勝義無自性性。乃至、諸声聞乗種性有情、亦由二此道此行迹一故、正得二無上安穏涅槃一。一切声聞独覚菩薩、皆共二此一妙清浄道一、皆同二此一究竟清浄一。更無二第二一。我依レ此故、密意説二唯有一乗一。非下於二一切有情界中一無上有中種種有情種性上。或鈍根性、或中根性、或利根性、有情差別上」。解云、此約二三乗同一所観無性道一故、密意説レ此名為二一乗一。理実三乗各証二涅槃一非是一也。（『大正蔵』巻三三・一一三・上）

先にも述べた通り、法蔵は三乗を主張する諸徳が挙げる教証としてこの『解深密経』第二の文を引用するのであるが、ここでは、『解深密経』第二の文を密意に一乗を説くが実には三乗を説くものと解釈して引用している。

さて、この法蔵が引用する『解深密経』第二の文は、円測の『解深密疏』・『究竟論』「列経通義章第五」には引用されていないことは既に述べておいたが、以下に示す通り、『究竟論』巻三「一乗顕密章第六」の中に『解深密経』第二の文を検出することが出来るのである。

二引文対顕者、先引二密意一乗経論文一、後引二究竟一乗経論文一。
密意一乗経論文者、一解深密経第二云、「乃至、更説二法要一。謂相無自性性勝義無自性性。乃至、諸声聞乗種性有情、亦由二此道此行迹一故、証二得無上安隠涅槃一。諸独覚乗種性有情諸如来乗種性有情、亦由二此道此行迹一故、証二得無上安隠涅槃一。一切声聞独覚菩薩、皆共二此一妙清浄道一、皆同二此一究竟清浄一、更無二第二一。我依レ此故、密意説二云唯有一乗一。非下於二一切有情界中一無上有中種種有情種性上。或鈍根性、或中根性、或利根性、有情差別上」。（『新卍続蔵』巻五五・四九一上）

傍線部で示した通り、『究竟論』と『探玄記』は同じく『解深密経』第二の文を引用していることが分かるが、この引用において注意すべきことは、両書の引用が共に「乃至…」の形で経文を省略して引用されている点にある。

経文を省略しての引用が『究竟論』と『探玄記』とで一致すると

いうことは、『究竟論』と『探玄記』の間に依用関係があった為であると考えてよいであろう。

また、ここでの『究竟論』と『探玄記』の引用文の一致が、従来より指摘されてきた『究竟論』の「列経通義章第五」ではなく「一乗顕密章第六」であることは、『究竟論』と『探玄記』の依用関係が両書の一部分に収まる議論ではなく、『究竟論』と『探玄記』の全体に渡っている可能性を示唆するものである。そして更に言えば、こうした一致が見られるということは、『究竟論』と『探玄記』の引用経論の一致を考える上で、円測の『解深密経疏』からの影響という視点以外からも考えなければならことを示唆するであろう。

そこで次に、『究竟論』と『探玄記』の引用経論の一致を、両書の全体に渡って追求していき、今暫く検討を続けていきたい。

②『仁王般若経』の引用について

『究竟論』と『探玄記』の引用経論の一致を両書の全体に渡って検討していくと、『究竟論』巻四「破法爾五性章第八」と『探玄記』巻十三「十重唯識」に一致箇所が認められる。

「破法爾五性章第八」は六門から法相唯識の法爾五性説を破折した章であり、「十重唯識」は経論によって様々な説相を持つ唯識説を十門に分類し論じる箇所である。

それでは、具体的に「破法爾五性章第八」と「十重唯識」との一致箇所についてみていきたいと思う。先ず「破法爾五性章第八」の「一述種性不同」には、如来蔵と蔵識の関係について次のように述べている。

又如来蔵与二識蔵一、諸経論中、或説為レ同、或説為レ異、皆不二相違一。如二密厳経下巻云一、「如来清浄蔵、亦名二無垢智一。常住無二終始一、離二四句言説一。仏説二如来蔵一、以為二阿頼耶一、悪慧不レ能レ知二蔵即頼耶識一。如来清浄蔵世間阿頼耶、如二金与二指環一、展転無二差別一」。准二此経文一、双説二理心二本性一也。〈中略〉金為二環体一喩二真諦一也。環為二金相一喩二俗諦一也。蔵即頼耶識者蔵為レ真也。識為レ俗也。諦雖二是二一、解常応レ一。仁王般若二諦品一云、「於レ諦常自二一、於レ解常自一也」。梁摂論云、「智障極盲暗、謂二真俗別一執」。故云、「悪慧不レ能レ知二蔵即頼耶識一」。然実真俗二諦不一不異。

（『仏文研紀要』一二二頁085―095）⑦

また、『探玄記』巻十三「十重唯識」は次の如くである。

六転レ真成レ事故説二唯識一。謂如来蔵不レ守二自性一、随縁顕二現八識王数相見種現一故。楞伽云、〈中略〉密厳経云、「仏説二如来蔵一、以為二阿頼耶一、悪慧不レ能レ知二蔵即頼耶識一」。又云、「如来清浄蔵世間阿頼耶、如二金作二指環一、展転無二差別一」。〈中略〉七理事倶融故説二唯識一。謂如来蔵挙体随縁成二弁

諸事、而其自性本不生滅。即此理事混融無礙。是故一心二諦皆無障礙。起信論云、〈中略〉勝鬘経云、〈中略〉経云、「於諦常自一、於解常自一」。論云、「智障極盲暗、謂真俗別執」。皆此義也。（『大正蔵』巻二三・三四七上中）

『究竟論』と『探玄記』に引用される経論の中、『密厳経』・『仁王般若経』・『摂大乗論』の引用が一致していることは明らかであるが、いずれの経論も当時に於いてはよく知られていた経論であることから、偶然の一致ということも考えられよう。

そこで、そうした可能性を消去するために今注目したいのが、『仁王般若経』の引用についてである。法宝と法蔵の『仁王般若経』の引用は、その生没年から考えて、いずれも羅什訳『仁王般若経』であることは間違いないであろう。その典拠となる羅什訳『仁王般若経』を見てみると、

於解常自一、於諦常自二（『大正蔵』巻八・八二九上）

とあり、法宝・法蔵の引用する「於諦常自二、於解常自一」と『仁王般若経』の「於解常自一、於諦常自二」の文とでは、偈の順序が異なっていることに気付くのである。つまり、法宝と法蔵は『仁王般若経』を引用するにあたり、共に自身の主張に沿うように原文に手を加えて引用したこととなる。

果たしてこれは偶然の一致なのであろうか。法宝・法蔵の引用以外には『仁王般若経』を「於諦常自二、於解常自一」と引用する著作はないことからも、これはやはり上述の『解深密経』第二の事例と同様に、「破法爾五性章第八」と「十重唯識」の間に依用関係があった結果に由るものであろう。

以上の結果と先の『解深密経』第二の文の引用を併せて考えると、『究竟論』と『探玄記』に見られる一致は、両書の全体に渡るものであると考えられるのである。

③『究竟論』と『五教章』における一闡提成仏の教証

これまで指摘してきた引用経論の一致箇所は、『究竟論』と『探玄記』の間のものであるが、法宝と法蔵の著作中の引用経論の一致は、『究竟論』と『探玄記』の間だけではなく、『究竟論』と『五教章』にも見られる。

『究竟論』と『五教章』に見られる引用経論の一致は、一闡提の成仏を主張する際に典拠として用いる経論である。上述の通り、法宝は『究竟論』巻二「列経通義章第五」に一乗思想と三乗思想の典拠となる経論を列挙している。その中に、一乗思想の典拠として『宝性論』と『仏性論』の二論を挙げている。法宝の引用は次の通りである。

七宝性論第三云、「是故華厳経性起中言、復次、乃至、邪見衆

等。衆生身中皆有二如来日輪光照一、作二彼衆生利益一、作二未来ノ因善根増長諸白法一故。向説、一闡提常不レ入二涅槃一、無涅槃性者。此義云何。為レ欲レ示二現誘大乗因一故。此明二何義一。為レ欲レ廻二転誹謗大乗心一不求大乗心一故。依二無量時一故、如レ是説。以二彼実有清浄性一故、不レ得説言二彼常畢竟無二清浄性一」。〈中略〉八仏性論第二云、「経中説、一闡提人堕邪定聚有二二種身一。一本性法身、二随意身。仏日慧光照二此二身一。法身即是真如、随意身者即従レ理起。仏光明憐二一闡提一身一者、一令二法身得一生、一為レ令二加行得レ長修菩提行一。故観得レ成。復有経説、一闡提衆生決定無二涅槃性一。若爾、二経便自相違。会二此二説一、一了、一不了。故不二相違一。言二有性一者是了説、言二無性一者是不了説。〈中略〉」。准二此論文一、故知、諸経論中、説二一分無性一為二不了義一、説二皆有二仏性一為二真了義一。

（『龍大論集』九九頁313―331）

『宝性論』と『仏性論』に説かれる内容は、何れも一闡提の成仏に関したものであり、一闡提の不成仏を説く経論を会通した内容となっている。法宝の引用意図としては、『仏性論』の引用後に「一分無性」を不了義とし「悉有仏性」を了義とすることから、「悉有仏性」の立場から「一分無性」を会通する目的であったことが分かる。なお、『究竟論』巻一「権実義例章第四」にも一闡提成仏の教証として、この『宝性論』と『仏性論』の二論が挙げられているこ

とから、法宝は一闡提成仏の教証としてこの『宝性論』と『仏性論』の引用文を重視していたことが知られる。[8]

さて、法宝が一闡提成仏の論拠として重視する『宝性論』と『仏性論』は、法蔵の『五教章』「種性義」にも引用されているのである。『五教章』「種性義」は、小乗教・始教・終教・頓教・円教の五教に説かれる種性について述べられたものであり、その中の終教の説に『宝性論』と『仏性論』とが引用されている。

問、若並有レ性、如何建二立五種性中無性者一耶。答、論自有レ釈。故宝性論云、「向説、闡提無二涅槃性一不レ入二涅槃一者。此義云何。為レ欲レ示二顕誘大乗因一故。此明二何義一。為レ欲レ廻二転誹謗大乗心一。依二無量時一故、作二是説一。以二彼実有清浄性一故」。〈中略〉問、前始教中決定説レ有二無性衆生一、此終教中並皆有性。云何会通。答、亦論自有レ釈。故仏性論第二巻云、「何故復有経説二闡提衆生決定無レ有二般涅槃性一。若爾、二経便自相違。如何。会二二説一、一了、一不了。故不二相違一」。

（『大正蔵』巻四五・四八六下）

法蔵の引用意図は、終教の「悉有仏性」の立場から始教に説かれる「一分無性」を会通する目的でることは、「問」の内容からも明らかであり、法宝の引用意図と同じであることが分かる。

『究竟論』と『五教章』で『宝性論』と『仏性論』の引用が一致

する問題については、新たな問題も含む為、これまでは触れてことなかった、これらの一致が法宝と法蔵のどちらが参照した結果によるものかを検討していく上で考えたいと思う。

三　三一権実論争との関連

①　法宝と法蔵の著作間における依用関係

さて本稿では、従来には指摘されてこなかった新たな一致箇所として、以下の三点を指摘した。

①『究竟論』と『探玄記』の『解深密経』の引用
②『究竟論』と『探玄記』の『仁王般若経』の引用
③『究竟論』と『五教章』の『宝性論』と『仏性論』の引用

ここで、これらの一致が法宝と法蔵のどちらが参照した結果によるものか検討していきたい。

先ず①と②の『究竟論』と『探玄記』の関係について検討していく。『究竟論』と『探玄記』に引用される『解深密経』と『仁王般若経』は、円測の『解深密経疏』を含む著作に引用がないことから、これらは『究竟論』と『探玄記』の依用関係であると考えてよいであろう。

両書の撰述年代から依用関係について検討していくと、現在の研究成果に従えば、『究竟論』の撰述年代は六九五年から六九九年頃の間に著され、『探玄記』は六九五から七〇五年の間に著されたと考えられている。[9] 奇遇なことに両書の撰述年代の下限は六九五年であり、これではどちらの著作が先行していたのか俄には判断することが出来ない。

そこで注目したいのが、『究竟論』の草稿本と考えられる『権実論』の存在である。『権実論』は従来の説では『究竟論』の異本と考えられることもあったが、『究竟論』の検出によって『究竟論』と『権実論』を対照して研究することが可能となった現在では、『権実論』は『究竟論』の草稿本と考えられている。[10]

この『権実論』は『究竟論』の草稿本であるので、『究竟論』以前の著述であり、『探玄記』に先行する形で存していたと考えてよいであろう。そして、『究竟論』と対応する『権実論』の箇所を見てみると、『究竟論』に引用される『解深密経』と『仁王般若経』の文は全く同様の形で『権実論』にも引用されていることを確認することが出来るのである。[11] そしてこのことから、『探玄記』が参照したのが『権実論』であるか『究竟論』であるのかはなお問題として残るが、法蔵が法宝の著作を参照したと結論付けることは可能であろう。

それでは次に、③の『究竟論』と『五教章』の依用関係について検討していきたい。先ず『五教章』の撰述年代についてであるが、これには従来より、三十有余歳以前説、四十二歳説、四十二歳以後

説の三説があるとされてきているが、現在最も有力な説は三十有余歳以前説である。この説に従えば、下限は六七六年となり、『究竟論』に先行する形となる。ただ『究竟論』との依用関係について考える場合、先の例と同様、その草稿本である『権実論』も含めて検討しなければならない。しかしながら、『究竟論』と対応する『権実論』の当該箇所は欠落しているため、どちらの著作が先行して存していたのか確定することが出来ない。

以上のことから、③の『究竟論』と『五教章』の依用関係については結論を保留せざるをえないが、『究竟論』と『探玄記』が同じく『宝性論』と『仏性論』とを引用する問題は、別の観点からも検討しなければならない。というのも、一闡提の成仏の教証として『宝性論』と『仏性論』の二論を引用することは、『究竟論』（『権実論』）と『五教章』撰述以前の霊潤の著作にも見られるためである。このことは、本稿が法宝と法蔵の著作間に於ける引用経論の一致を、三一権実論争の上に関連付けれるのではないかとする推測を裏付ける論拠となるであろう。

そこで、以下にこの問題について改めて検討していきたいと思う。

② 霊潤『十四門義』との関連

霊潤の事蹟については、道宣の『続高僧伝』の記述に詳しい。[12]『続高僧伝』の記述によれば、霊潤は涅槃学派・摂論学派の論師とされ、『涅槃経』の解釈に特に勝れた論師であったようである。また、霊潤は玄奘の訳場にも参加していたようであるが、最澄の『法華秀句』中巻に、

> 唐朝翻経証義沙門霊潤法師造一巻章、弁新翻瑜伽等与旧経論相違、略出十四門義。（『伝全』巻三・一五四頁）

とあることから、玄奘によって新たに招来された唯識文献と従来より伝わる経論との相違について記した『十四門義』という著作が有ったことが知られる。[13]

幸いなことに、この『十四門義』の第一門の全文が『法華秀句』中巻に抄録されており、[14]その中に上述において問題とした『宝性論』と『仏性論』の引用が見られるのである。煩を厭わず示せば以下の通りである。

> 又宝性論云、「向説、一闡提常不レ入二涅槃一者。此義云何。為レ欲レ示二現謗大乗因一故。此明二何義一。為レ欲レ廻二転誹謗大乗心一故。此依二無量時一故、如レ是説。以二彼実有二清浄性一故、不レ得レ説言二彼常畢竟無二清浄性一」。〈中略〉又仏性論引二経中説一、「一闡提人堕邪定聚有二二種身一。一本性法身、二随意身。仏日慧光照二此二身一。法身者即真如理、随意身者即随二如理一起。仏光明為二憐愍一闡提二身一者、一為レ令二法身得一生、二為レ令二加行得レ長修二菩提行一。故観得レ

成。復有経説、闡提衆生没無レ有ニ涅槃性一。若爾、二経便自相違。会ニ此二説一、一了、一不了。故不ニ相違一。言レ有レ性者是名ニ了説一、言レ無レ性者是不了説」。依ニ上経論一、諸仏菩薩已自会通。説レ有ニ一分無仏性一者是不了説、有ニ仏性一者是名ニ了説一。

（『伝全』巻三・一七一頁）[15]

右の『十四門義』の『宝性論』と『仏性論』の引用に続く文を見れば、その引用意図は法宝と法蔵の引用と同様に、「悉有仏性説」からの「一分無性説」の会通であることは明白であろう。

先に『究竟論』と『五教章』の依用関係を問題とした際に、どちらの著作が先行して存していたのかを確定することが出来ないことから、その結論を保留しておいた。しかしながら、今、『究竟論』と『五教章』に引用される『宝性論』と『仏性論』とが、霊潤の『十四門義』にも引用されていることが明らかとなったのである。そこで改めて『究竟論』と『五教章』の引用経論の一致について考えてみると、両書が共に『十四門義』を参照した可能性も考えられ、必ずしも『究竟論』と『五教章』の依用関係に拘る必要がないこととなる。またこのことは、法宝と法蔵の著作間における一致を、霊潤の『十四門義』との関係から考える必要があることを意味するのである。

さて、新たに浮上してきた問題である霊潤との関係について、『十四門義』中に最も多く引用される『涅槃経』より考えていきたい。そこで思い出したいのが、上述の『解深密経疏』巻四・『究竟論』巻二「列経通義章第五」・『探玄記』巻一「第三立教差別・第五明現伝」の一乗思想と三乗思想の教証として経論を引用する箇所である。

先に掲げた『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』の引用経論の対照表から、『涅槃経』の引用を抜き出せば以下の通りである

●一乗思想の教証

『解深密経疏』	『究竟論』	『探玄記』
① 涅槃経巻七	② 涅槃経巻二七・二六・二七	① 涅槃経巻二三
② 涅槃経巻二五		
③ 涅槃経巻二七		
④ 涅槃経巻二三		

興味深いことに、『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』の当該箇所に引用される『涅槃経』の全てが、既に霊潤の『十四門義』に引用されているのである。[16]このことから、『解深密経疏』・『究竟論』・『探玄記』に於ける引用経論の一致は、それぞれが霊潤の『十四門義』を参照した結果によるものであるとも考えられるのである。また『十四門義』の十四門より構成される僅か一門の中でこれ程一致するということは、推測の域を出るものではないが、散逸した残りの十三門を含めば更に一致する可能性があるであろう。[17]

そして、話を法宝と法蔵の著作間の一致と霊潤の『十四門義』との関係に戻せば、『究竟論』と『五教章』とに見られる引用経論の一致についても、両者が霊潤の『十四門義』を共に参照した結果であると言えるのである。

また、法宝と法蔵の著作間の一致が霊潤の『十四門義』と関係するということは、これらの一致が霊潤との関係のみでなく、当時の三一権実論争と密接な関係を持つのではないかとも考えられるのである。

③ 三一権実論争との関連

前述の通り、法宝と法蔵の著作間の一致が霊潤の『十四門義』と関係することは、今一歩考察を進めて、当時の三一権実論争との関連についても検討する必要がある。

最後にこの点について検討していきたいと思うが、この問題を検討するにあたり注目したいのが、『究竟論』巻五「対妄通経章第十」と『五教章』「種性義」とに共通して言及される、『涅槃経』巻二七の文の解釈を巡る論難についてである。

『五教章』「種性義」には、『涅槃経』巻二七の文の解釈について、或る人の論難として次の説を紹介している。

> 問、如二有難云一、若諸有レ心悉得二菩提一者、仏亦有レ心亦応二当得一。若言二仏雖レ有レ心更非レ当レ得、是即無性衆生雖レ有二是心一亦非レ当レ得。

（『大正蔵』巻四五・四八六下）

「有難云」とあることから、この文言が或る者の論難であることは明かであろう。ここでの論難は、『涅槃経』巻二七「師子吼菩薩品第十一之一」に、心有る者は必ず成仏すると説かれる教説に対するものであり[18]、その内容は、全ての心有るものが菩提を得るのであれば、仏にも心が有るので仏が更に成仏するということになり、また逆に、仏には心が有るものの成仏することはないとすれば、無性の衆生も心は有っても成仏することがないのではないかというものである。

この論難については、『究竟論』巻五「対妄通経章第十」にも紹介されており、

> 四妄通、涅槃二十七云、「衆生亦尒。悉皆有レ心。凡有レ心者定当レ得レ成二阿耨菩提一。以二是義一故、我常宣二説一切衆生悉有二仏性一。」通云、〈中略〉故知、凡有心之言、未下必即収二一切有心者一尽上。又云、已成仏者亦是有心。此豈当二成仏一也。

（『仏文研紀要』一四〇頁314―一四一頁326）

とある。

この論難を『法華秀句』中巻を検討してみると、神泰が「一巻章」の中で霊潤に対して加えた論難の文言であることが分かるので

ある。

・最澄『法華秀句』中巻（「義栄章」）

立二無性一者云、謗法者云、「依二彼涅槃二十七巻一云、衆生亦爾。悉皆有レ心。凡有レ心者、定当レ得レ成二阿耨多羅三藐三菩提一。以二是義一故、我常宣二説一切衆生悉有二仏性一。若有二一分無性人一者、亦応レ立レ有二一分無心衆生一」者、此義不レ然。此由レ不レ解二経文一。故興二此難一。〈中略〉当レ知。凡有レ心者、未下必即収二一切有心者一尽上。又若執二彼凡是有心皆当作仏一、仏亦有心。亦応二更有二当作仏義一。〈中略〉直筆曰、…

（『伝全』巻三・二一七―二一八頁）

『法華秀句』の当該箇所は、霊潤の『十四門義』を批判をした神泰の「一巻章」に対して義栄が批判を加えた箇所となっている。この記述では、「立二無性一者」が神泰で「謗法者」が霊潤となっており、「興二此難一」として霊潤の『涅槃経』巻二七の解釈を神泰が批判しているのである。

以上のことから、『究竟論』巻五「対妄通経章第十」と『五教章』「種性義」とに共通して言及される論難の文言は、神泰が霊潤を批判したものであることが分かる。『究竟論』と『探玄記』は、この論難を同じく紹介し批判しているのである。この事実は、法宝と法蔵の著作間の一致が霊潤の『十四門義』との関係のみでなく、当時の三一権実論争と密接な関係を持つことを示すのではなかろうか。

結　語

以上、新たに検出することのできた、法宝と法蔵の著作間における一致箇所について検討してきた。そこで、これまでの検討結果を纏めれば、以下の通りとなる。

従来の説では、法宝と法蔵の著作間における一致は、円測の『解深密経疏』からの影響や、法宝と法蔵の著作間の依用関係という観点から考えられてきた。

しかしながら、『究竟論』と『五教章』が一闡提成仏の教証として『宝性論』と『仏性論』を共通して引用するという一致について検討すると、同じ引用が霊潤の『十四門義』にも見られることが明らかとなった。また、従来より指摘されてきた一致箇所である『解深密経疏』巻四・『究竟論』巻二「列経通義章第五」・『探玄記』巻一「第三立教差別・第五明現伝」に一乗思想の教証として引用される『涅槃経』については、その全てが霊潤の『十四門義』に引用されていることを確認することができた。

以上のことから、法宝と法蔵の著作間における一致は、霊潤の『十四門義』と密接な関連を持つと考えてよく、それは即ち、法宝と法蔵の著作間における一致が霊潤の著作を共に参照した結果によるという側面を持つということである。

また、法宝と法蔵の著作間における一致は、『究竟論』巻五「対

妄通経章第十」と『五教章』「種性義」の事例より分かる通り、霊潤の『十四門義』との関係のみでなく、神泰の「一巻章」とも関連するのである。このことから、法宝と法蔵の著作間における一致は、三一権実論争にて著された霊潤の『十四門義』と神泰の「一巻章」とを共に参照した結果によるものであると考えられるのである。

こうした結果は、何も法宝と法蔵の著作間における一致を、円測の『解深密経疏』からの影響や、法宝と法蔵の著作間の依用関係から考えることを否定するものではない。つまり、法宝と法蔵の著作間における一致は、従来より指摘されてきた、①円測の『解深密経疏』からの影響、②法宝と法蔵の著作間の依用関係、③三一権実論争との関連といった、複雑な要素より成り立っているものであると考えられるのである。

註

① 久下陞『一乗仏性権実論の研究（上）』（一九八五年、隆文館）参照。

② 根無一力「一乗仏性究竟論の撰述と時代背景」（『叡山学院研究紀要』第九号、一九八六年）参照。

③ 法宝が大薦福寺に住したことは、『涅槃経疏』に「大般涅槃経疏唐大薦福寺沙門法宝述」とあることより推測できる。また、仏授記寺については、法宝の『倶舎論疏』の撰号に「仏授記寺」（『大正蔵』巻四一）とあり、源信の『一乗要決』に「大唐仏授記寺沙門法宝造」（『大正蔵』巻八四、名ニ一乗仏性究竟論一。破ニ三乗五性義一、立ニ一乗仏性義一）とあることによる。

④ 淺田正博「石山寺所蔵『一乗仏性究竟論』巻第一・巻第二の検出について」（『龍谷大学論集』四二九号、一九八六年）、同「法宝撰『一乗仏性究竟論』巻第四・第五の両巻について」（『仏教文化研究所紀要』二五集、一九八六年）参照。

⑤ 梯信暁「『一乗仏性究竟論』巻五の問題点―『対妄通経章第十』における円測批判―」（共同研究「『一乗仏性究竟論』における問題点とその検討（一）」・『仏教文化研究所紀要』三四集、一九九五年）参照。『究竟論』巻五「対妄通経章第十」は十二段より構成されており、それぞれの段は、三乗家が一乗を説く経論を会通した説を「妄通…」として取りあげ、その会通説に対して法宝が「対曰…」と一乗の立場から論破するという形式で論が進められている。梯氏はその十二段の中、二・五・六・七・八・十段に円測の説を「妄通」として批判していることを指摘している。

⑥ 『究竟論』のテキストは、巻一・二は淺田正博「石山寺所蔵『一乗仏性究竟論』巻第一・巻第二の検出について」（『龍谷大学論集』四二九号、一九八六年）、巻四・五は淺田正博「法宝撰『一乗仏性究竟論』巻第四・第五の両巻について」（『仏教文化研究所紀要』二五号、一九八六年）に翻刻されているものを用い、論文の頁数と論文中に記されている写本の行数を記載しておく。また巻三については『新卍続蔵経』に所収されているものを用いる。その引用に際しては、新字に改め、誤写と思われる字についてはそれを改めその理由について注記した。なお、淺田正博先生によって新たに検出された『究竟論』四巻については、先生より石山寺にて撮影された写真版を参照するようお勧め頂いた。ここに記して学恩に深く感謝申し上げます。

⑦ 写本には「旨」とあるが、出拠である『摂大乗論』に従い「旨」に改める。

⑧ 『龍大論集』八九頁275―283を参照。

⑨ 『究竟論』の撰述年代に関しては根無前掲論文、『探玄記』の撰述年代については吉津前掲書を参照。

常宣二説一切衆生悉有二仏性一」。（『大正蔵』巻十二・五二四下）参照。

⑩ 吉田健一「『一乗仏性究竟論』と『一乗仏性権実論』との対照検討」（共同研究「『一乗仏性究竟論』の共同研究」・『印度学仏教学研究』三五巻二号、一九八七年）参照。

⑪ 『権実論』中の『解深密経』第二については、久下陞『一乗仏性権実論の研究（上）』一五〇・一五四頁、『仁王般若経』は二六七頁参照。

⑫ 道宣『続高僧伝』巻十五（『大正蔵』巻三一・五九五上）参照。

⑬ 『法華秀句』に記載される「一巻章」の具体的な書名については知られていないが、『一巻章』・『十四門義』とも呼称されている。本稿では『十四門義』と呼称されるに従っておきたい。

⑭ 最澄の『法華秀句』中巻は複雑な構成となっている。その内容・構成の理解に当たり、田村晃裕「最澄『法華秀句』中巻について」（『東洋学論叢』三三集、一九八〇年）、淺田正博「『法華秀句』中巻別撰説について―守護国界章との関連において―」（『仏教学研究』四一号、一九八五年）を大いに参照した。

⑮ 「随」を「堕」に、「視」を「観」に改める。いずれも『伝全』巻三・一七一頁の頭注と、出拠の『仏性論』によって改める。

⑯ 『十四門義』では、『解深密経疏』の『涅槃経』巻七の引用は『伝全』巻三・一五七頁、巻二五は一六〇―一六一頁、巻二七は一五七頁、巻二三は一五八頁に引用されている。また、『究竟論』の『涅槃経』巻三六の引用は一五八頁に、巻三七は一六二頁に見られる。

⑰ 『法華秀句』中巻に抄録される第一門には、『解深密経疏』『究竟論』『探玄記』が一乗思想の教証として引用する『法華経』が全く引用されていない。しかしながら、『法華秀句』に記される『十四門義』の構成をみると、第二門「二乗之人入無餘涅槃。永不入大」（『伝全』巻三・一五四頁）や第三門「三不定性聲聞向大乗者。延分段生行菩薩道」（同上）のテーマ的には『法華経』の引用が予想され、散逸部分を含めば更なる一致が見込めるのではなかろうか。

⑱ 『涅槃経』巻二七「師子吼菩薩品第十一之一」「衆生亦爾。悉皆有心。凡有心者定当得成阿耨多羅三藐三菩提。以是義故、我